

概要

小山田将大

筆者の地元・鎌倉市にはかつて「松竹大船撮影所」という国内最大級の映画スタジオが存在した。日本を代表する映画会社の一つ・松竹株式会社が所有しており、1936年の開所以来、街は映画人で溢れかえり、「東洋のハリウッド」という愛称で長きに渡って親しまれてきた。だが、2000年6月、撮影所は関係者に惜しまれながらも、度重なる経営不振によりその歴史に幕を閉じた。以降、大船の街から「映画」は完全に撤退し、その跡地には鎌倉女子大学とショッピングセンターが建っている。

『東京物語』『男はつらいよ』など数々の名作が産声を上げた松竹大船撮影所。地元ではあるが、筆者はその歴史の過程を知らない。何故撮影所は閉鎖され、「東洋のハリウッド」は衰退へと向かわざるを得なかったのか。その歴史から衰退の原因を探ることで、日本映画の変遷も同時に解明することができるのではないかと。以上をリサーチクエスションとして設定し、筆者の地元にまつわる松竹大船撮影所の歴史を基点に、日本映画がいかなる変化を遂げたのか立証することを本論文の目的とする。

研究手法として、松竹大船撮影所の全盛期をよく知る関係者が記した文献を中心にその栄枯盛衰の歴史を辿る。当時を物語る貴重な資料は地元・鎌倉市の図書館や資料館から調達する。映像資料として撮影所全盛期に製作された松竹映画を鑑賞し、そこから浮かび上がる作品のテーマや当時の時代背景を推察する。さらに、かつて撮影所に在籍した経験のある松竹株式会社の山本一郎氏、株式会社松竹映像センターの阿部勉氏への独自取材を敢行、当時の撮影所内の様子や今後の松竹の展望について知る。

本論文では、まず松竹株式会社の誕生、大船撮影所の前身となる松竹蒲田撮影所時代の歴史から論じていく。そして1936年から始まる松竹大船撮影所時代を概観し、当時話題となった名作・監督を紹介することで撮影所の黄金時代を振り返る。その後迎える映画斜陽期、そこから派生する松竹株式会社の新規事業の開拓と失敗という映画史における負の歴史を伝える。最後は撮影所衰退の要因を考察し、現在の大船と松竹の展望を記すことで本論文の総括とする。